現代世界演劇

17

現代世界演劇 17 （全17巻別巻1）
最新劇

一九七二年三月一五日印刷
一九七二年三月二四日発行

定価一二〇〇円

訳者 ©
小田島雄志　斎藤偕子　喜志哲雄　利光哲夫　佐伯隆幸　岩淵達治　上田二郎　丸山匠　大島勉

発行者　寺村五一
印刷者　田中昭三
発行所　株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京三三二二八
郵便番号一〇一

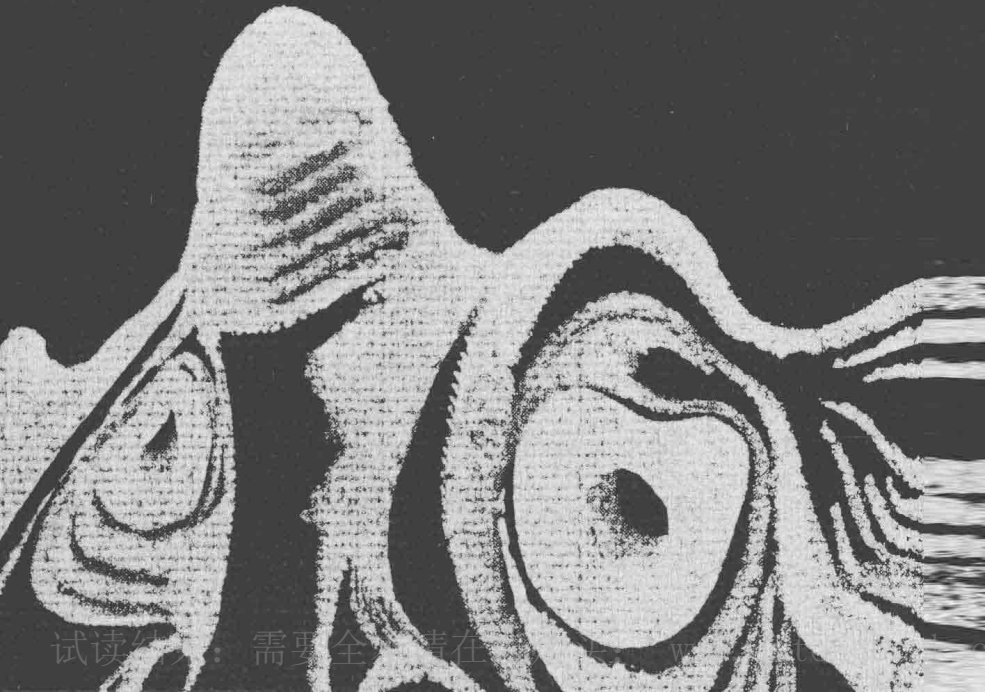
理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 51670 (出) 6911

現代世界演劇

17

最新劇



试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

目次

M・テリー作　小田島雄志訳
出会いのトランポリン……7
《リヴィング・シアター》集団創作　斎藤偕子訳
パラダイス・ナウ……37
J＝C・ヴァン＝イタリー作　喜志哲雄訳
蛇……57
G・フォワシイ作　利光哲夫訳
壁の崩れるのを眺めて……111
C・モーリアック作　利光哲夫訳
ここで、今……133
《テアトル・デュ・ソレイユ》集団創作　佐伯隆幸訳
一七八九……173
R・W・ファスビンダー作　岩淵達治訳
外人野郎……203

W・フォステル作　上田浩二訳
ウルムのうちそと――ウルムをめぐる……231
W・バウアー作　丸山　匠訳
マジック・アフターヌーン……253
P・ハントケ作　大島　勉訳
観客罵倒……303
解　題……335
解　説　利光哲夫……345

装幀　朝倉　攝

出会いのトランポリン

ミーガン・テリー作　小田島雄志訳

Megan Terry
COMING AND GOING
© 1966 by Megan Terry, Japanese translation rights arranged by Simon & Schuster, Inc., through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

演出ノート

この劇は、俳優と観客の双方に、技法（テクニック）を――俳優の場合は純然たる芸を――楽しんでもらおうと思って書いたものである。この劇のおもしろさは、観客がどれだけ巻きこまれ、熱中するか、にかかっている。カフェ・ラ・ママ実験演劇クラブでこれを上演したとき、三晩つづけて見にきた人たちがいた。そして、そのたびにちがう劇になった。そのときから、一晩に二回上演してみればよかった、と思っている。この劇は、俳優の想像力を要求するだけでなく、その肉体の妙技、チーム・プレーの能力、および知性を必要としている。

この劇をとりあげるとき、二つの方法が考えられる。想像力に富む演出家ならばまだほかにも見つけるだろう。わたしたちが上演したときは、俳優の名前を書いた小さなカードを使った。三十五秒ないし一分半おきに、第三者によって円盤がまわされる。ひとりの名前が呼ばれる。するとその俳優が劇に飛びこみ、別の俳優が劇から飛び去る。

わたしがもともと考えていたのは、演出家が俳優たちといっしょにベンチにすわっており、バスケットボールの試合でコーチがやるように、俳優たちを出し入れする方法である。そしてまだこの方法をためしてみたい気もしている。しかし、そうすると、ある個性がはじめていた役をまったく別の個性が引きつぐ――場合によってはセンテンスの途中で――ときに生まれる、すばらしい偶然のコメディを失うことになるかもしれない。

わたしたちはカフェの中央を舞台にし、一方に男優たちのベンチ、他方に女優たちのベンチをおいた。円盤をまわして名前を読みあげる人は、観客からよく見えるところに席をとり、テニスやバスケットボールの試合の役員のような態度をとった。女優たちはタイツをつけ、シンプルで、カラフルで、すらっとした服を着た。男優たちは白いズックのズボンをはき、キラキラしたホッケー用ジャージーを

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

着た。道具としては、白い小さな箱三個、白い台一個を用意した。台は、ときには玉座になり、ときには帆船になり、ときにはインディアンの小馬になった。俳優たちの創意は無尽蔵のように思われ、一回ごとにふくらんでいった。

さらに、見てもやってもひじょうに楽しいだけでなく、この劇は俳優の集中力、柔軟性、アンサンブル力などを養うことができる。台詞はしっかりしたシチュエーションにおかれているので、俳優は技術的にやれると思えば自由に飛翔していい。わたしはこの劇を、俳優と演出家のためのトランポリンと考えたい。わたしたちは三人の男優と三人の女優で上演した。もっと多数でも少数でもやれるだろう。あるいは変身劇として、ひとりの男優とひとりの女優でやることもできるだろう。演出家は、自分や俳優たちに処理できないシーンを自由にカットしていい。

ひとりの男とひとりの女がベンチから立ちあがり、舞台中央に行き、そこに落ち着く。彼女は眠っているかのようにうずくまる。

彼　（鋭く、おどすように）　さあ、キスを。
彼女　あとで。
彼　いまだ。
彼女　あとで。
彼　もう朝だ。
彼女　あとで。
彼　もう時間だ。
彼女　あとで。
彼　もう行くぞ。
彼女　あとで。
彼　さあ、キスを。
彼女　あとで。
彼　おれはもう行くぞ。
彼女　あとで。
彼　さよなら。
彼女　嘘。
彼　ほんとだ。
彼女　あとで。
彼　時間切れだ。
彼女　嘘。
彼　いまだ。
彼女　（立ちあがって）　いいわ。

このシーンを三度繰り返す。どのシーンも間をおかずに次のシーンに変容する。

台所。

彼女　ピストルをおいてお皿をふくの手伝ってよ。
彼　まだこいつをきれいに磨きあげてないんだ。
彼女　あんたったらいつもわたしのきれいな台所でそのあぶなっかしいものをきれいに磨くのね。

彼　ほかにきれいに磨く場所があるか？　どこにある？
おまえが台所をきれいに磨きあげて立派なお手本を見せてくれてるんだ、おれがピストルをきれいに磨くにはここがいちばんだと思うのも当然だろう。
彼女　わたしのきれいな台所でどなりちらすのはよして。
彼　おまえだっていまおまえのきれいな台所でどなりちらしたじゃないか。
彼女　嘘おっしゃい。
彼　おっしゃいとは命令形だな。
彼女（皿を洗いながら）　なによ、意地悪。
彼　ほらまたどなる。
彼女　あんたと話してるとちっとも気分がやすまらないわ。
彼　おれだっておまえに期待してるのはそれなんだぜ。
（彼女の大事なところを軽くたたく）
彼女（布巾で彼をぶって）　よしてよ、いやらしい人。
彼　おれはおまえのいやらしい人さ、おまえだけの、ひじょうにいやらしい人なんだ。おいで。おれをきれいに磨きたいんだろ？　さあおれをたっぷり磨きあげてくれ。（彼女を抱きしめる。彼女は笑いながら応じる）

二人は抱きあったまま壁のソケットとこわれた差しこみに変わる。

彼女　どうかしたの？　あんた、急にすべり抜けたような感じよ。
彼　そうなんだ、つけ根のところのネジがゆるんだような感じだ。
彼女　あんたの電球、チカチカしてる。
彼　わかってるよ。あのばかが新聞をおいてネジをしめなおしてくれないと、すっかり消えてしまうんだがな。
彼女　あの男はだめよ。立ったりするもんですか。
彼　女のほうがましだな。
彼女　女は少なくとも受け入れることはできるわ。
彼　きみ、少し潤滑油を出せないかい？
彼女　ばかなこと言わないで。
彼　なんにもできないのか、いいことは？
彼女　忠実であることはできるわ、それだっていいことでしょう。

彼は彼女を揺すぶりはじめる。彼は彼女を自動車から引きずり出そうとする。雨が降っている。夜のハイウェーのカーヴしているところ。

彼　やいやい、お嬢さんよ、おれの車になんてことをしてくれたんだ、え？　よくそれで運転してやがったな。どうしたってんだ――酔っぱらってるのか？　そうなんだな？　なにか言いわけがあるかよ、神さまに向かって言いわけできるかよ、え？　おれの車の助手席でひしゃげたドアの下敷きになってるものがなにか、わかってるのか？　おれたちは雨ん中をドライブしてたんだ、おふくろは雨が好きなんでね。おふくろを見せてやろうか。おふくろがどんなになったか見せてやる。おれの気がすむまで、九十年は刑務所にいてもらうぜ。（彼は彼女の一方の肩をつかんだまま車のドアをあけ、おびえている彼女を運転手席から引きずり出す。彼女はショックで呆然としている）

彼女　雨ね。暗いわ。雨が降っているのね。

彼　雨だ。きれいだ。なぜちゃんと目をあけて運転しなかったんだ？　免許証もってるのか？　もってねえんだろう。それで運転していいのか？　おれは六十キロも出してなかったんだ。（彼は彼女を引き寄せる）ははあ、飲んでたな、やっぱり！　なんて女だ。あんまりだぜ。

彼女　わたしの誕生日なの。雨ね。

彼　（彼女を自分の車のほうに追い立て、むりやり頭をおさえて、めちゃめちゃになった母親の死体を見せる）見ろ！　てめえがやったんだぜ、この――この――女！

彼女　ああ、なんて恐ろしい！　あの人はまだお財布を握っている。少女のようにお財布を握っている。まだお財布を握っている。

彼　（彼女を引きずり倒しながら）顔を押しつぶされるってどんな気持ちかわからせてやろうか。（彼はむりやり彼女を道路に倒し、彼女の顔を踏みつぶそうとする）

彼はリストを書いている鉛筆になる。彼女はリストになり、彼が体を使って書くリストを読みあげる。

彼女

車を修理に出すこと。

シャツを買うこと。

ジョージに問いただすこと。
ジョーの仕事場に行くこと。
今後五年間の計画をたてること。
新しいパンツを買うこと。
帰り道で手紙を出すこと。
ロジャーの家に寄って鍵をもらうこと。
モーツァルトのミサ曲の切符を問いあわせること。
ミスター・ジョーダンの葬式に出ること。
車を修理に出すこと。（彼はよろめき、彼女のそばに倒れる）

早朝のベッドのなか。

彼女　あなた？
彼　ウウーン。
彼女　目覚ましよ。
彼　グウウー。
彼女　起きて。
彼　ンンーン。
彼女　起きて。
彼　グウウ。
彼女　起きて。
彼　やるか。
彼女　なによ、いまはだめ。
彼　ウウーン。
彼女　あなた？
彼　オーケー。
彼女　あなた？
彼　オーケー。
彼女　目覚ましよ。
彼　オーケー。
彼女　起きて。
彼　オーケー。
彼女　あなた？
彼　オーケー……（彼は勢いよく飛び起きる）

居間。彼は歩きまわり、彼女はすわっている。

彼　どうしてそんなに欲ばりなのかわからんね。これ以上なにをほしがるんだ？　おれがまだやってないことでお

まえにしてやれることがなにかあるか？　なんだ、いったい？　さっぱりわからん。おまえは口にこそ出さないが、だが――なにかを求めている、なにかを。おれにはおまえのその背中を丸めた体の内側にほんとうのおまえがうずくまっているのが見える。だからおまえがなにかを求めていることはわかる。だがなにを求めているのかわからん。なんだ、いったい？　ほんとうに求めているのか？　え？　おれがなに言ってるのかわからんのか？　え？　どうなのだ――え？　だがおまえはそうしてすわって、なにかを求めている。なにかを求めている、なにかを。そしておれはこうして突っ立って、おまえがなにかを求めているそのなにかがわからんでいる。おれはこうして立っている、そうだろう？　少なくともおれはここにいる。おまえといっしょにここにいる。そうだろう？　え？　おまえの亭主はここにいる。いるだろう、え？　腕が二本、足が二本、頭がひとつ、だれだってこんなものだ。それなのにおまえはなにかを求めている。おまえのなかにその衝動が見える。おれにどうしろと言うんだ？　おれになにを求めるんだ？　あっちへ行けか、こっちへ来いか。このままじゃあいやなんだろう！

彼女は泣く。

彼　それか、おまえが求めていたのは？　それか、おまえがしたかったのは？　それだけだったのか？　泣きたかったのか？　そんなばかな。そうやってごまかそうったってだめだぞ。そんな罠におれがひっかかるものか。おれはおまえがなにを求めているかきっと見つけ出してやるからな。聞いてるのか？　必ず見つけ出してやるからな、たとえ死ぬまでかかっても……死ぬまでかかってもな！　（彼女はひとりで小さな微笑をもらしはじめる）

彼女は立ちあがって彼とむかいあう。二人の体と顔は歌舞伎のような形をとる。平凡な台詞は、死者に呼びかけるように、あわれっぽいがたっぷりとした声で詠唱されなければならない。

彼　どこへ行く？

彼女　オシッコに。

彼　よろしい。いつ帰る？

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c